孔雀茶屋心中

孔雀茶屋心中

杉本苑子

読売新聞社

著者略歴　すぎもと　そのこ

大正14年6月26日、東京に生まれる。

昭和37年下半期「孤愁の岸」で第48回直木賞受賞。

「瑪瑙の鳩」「愛憎流転」「春日局」「今昔物語ふぁんたじあ」ほか著書多数。

現住所　田無市向台1の13の9

孔雀茶屋心中（くじゃくぢゃやしんじゅう）

昭和四十八年十一月十五日　第一刷

著者　杉本苑子（すぎもとそのこ）

発行者　松田延夫

発行所　読売新聞社

東京都千代田区大手町一の七の一　〒一〇〇

大阪市北区野崎町七七　〒五三〇

北九州市小倉区明和町一の一一　〒八〇二

印刷所　大日本印刷株式会社

製本所　協和製本株式会社

定価　八五〇円

©, Sonoko Sugimoto, 1973

0093—701420—8715

目次

花冷え　5
ひばり笛　47
仙女ろまんちか　73
恐ろしい笑顔　103
浪人とねずみ　145
遠山がすみ　189
真説かがみやま　213
孔雀茶屋心中　263

裝丁　難波淳郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

孔雀茶屋心中

杉本苑子時代小説集

花冷え

I

一人きりの居残り仕事をやっと終えて、机上の文書類を片づけているところへ、
「来てくださいッ、道場へ……」
奥お坊主の風見宗意が、少年特有のカンだかい声を先立てながら、役部屋に走りこんできた。
「どうした。なにをあわてているんだ」
小幡恭一郎は手をとめて、宗意の顔を見た。お坊主はベソをかいている。
家が隣り合っているせいもあって、日ごろ、兄と弟のように二人は仲がいい。泳ぎも魚釣りも、今年十四になる宗意に伝授してやったのは恭一郎である。
城内でも、だから何かにつけて、宗意は恭一郎の詰める勘定役所へやってくる。弁当は、だまってい

てもどこかへ持って行って温めてくるし、そのへんがお坊主勤めの役得か、
「内緒ですよ」
御膳所から、奥にさしあげた汁の残りなど椀へくすねて、弁当に添えて持ってきてくれることさえある。
「おいおい風見、きさま、殿のお給仕係か、小幡の茶坊主か」
役所の同僚がからかうと、ほっぺたをふくらましてむくれるところなど、小柄なせいもあって子供っぽい。
その宗意が、血相を変え、くちびるをぶるぶる慄わせながら、ただ、
「はやく、はやく……」
袖をひっぱるのに恭一郎はあきれた。
「待てよ。机のまわりを散らかしっぱなしにしては行けないよ」
「それどころじゃありません。殿が刀を抜いて二階堂どのに、立ち合えとおっしゃっておられるんです」
「二階堂——外記か？」
「そのほうも、真剣をとって予にかかってこい、おたがいの真の技倆を知るためだ、問答は無用だと、さけんでおられます」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

「まさか、そんな……」
「ほんとうです。殿は本気です。行っておとめしてくださいッ、はやく……」
書類を、恭一郎はほうり出した。
剣槍の道場は弓場と並んで、内曲輪の南のはずれに建てられている。馳けつけたときは、しかしひと足、おそかった。おそらく再三、固辞したにもかかわらず、聞きとどけられなかったのだろう。二階堂外記は汗止めをし袖をくくり、袴のももだちを高くあげて、白刃を正眼に構えたまま、安芸守長員と向き合って立っていた。血の色がない。死を覚悟した顔である。
安芸守もまっ青だ。彼は十九歳……。家督をしてまもない青年君主だし、外記は九つ上の二十八である。
手をとって安芸守を教導した外記は剣の師範だ。いわゆる筋がよいのか安芸守はめきめき上達して、いまでは師の外記すらが、三本に二本は打ちこまれるまでになっていた。まして、ほかの藩士では歯が立たない。殿さま芸の域をぬきん出るほどの丹精を、惜しまなかった外記だけに、安芸守はその腕を知っている。自分から、無二無三に挑んでかかった勝負とはいえ、いざ外記が、辞しきれずに真剣を抜いたのを見ると、安芸守は緊張のため、石にでもなったように四肢がこわばってしまった。むろん、はじめての体験だ。
外記も同様だろうが、彼の全身からは困惑と、悲痛な絶望だけがにじみ出ていた。

安芸守を、かろうじて支えているのは怒りである。蒼白な顔面の中で、ぎらぎら両眼だけが、象嵌でもしたように燃えている。

腕の立つ者同士が刀を構え合っては、もう引き分けられない。一瞬、入り口に立ちすくんだが、

「しばらくッ、殿、しばらくッ」

小幡恭一郎は声をかけながら、意を決して道場へとびこんだ。

「なにごとのご意趣かはぞんじませんが、真剣をもって家臣と立ち合われるなど、ゆゆしい曲事でございます。おとどまりを……」

「だまれ、口出しするなッ」

怒号したことで、緊張の均衡がくずれた。

刹那のその、乱れを、安芸守は突かれまいとあせって、いきなり打ちこんでいった。外記が思わず、切先を受けとめたのは、本能にうながされての自衛であろう。鍔もとで蛇さながらからみ合って、二つの刀身はチカと火花を発した。

どこからか、そのとたん、はげしい叱責が投げつけられた。

「お手向かいする気か二階堂ッ」

喘いで外記はとびすさった。安芸守は踏みこんだ。

ふりおろす太刀を、外記はこんどは避けなかった。斜め下に切先を伏せざま、身体で受けとめでもす

るように安芸守の一撃を、進んで左肩に浴びた。ぞんぶんすぎる袈裟掛けである。
噴出する自身の血に、外記はまみれ、刀をつかんだままよろめいて、前へ倒れた。
「おみごとにあそばしました」
と安芸守のかたわらに、走り寄った者がある。
はじめてこのとき、小幡恭一郎は、自分のほかにいま一人、道場に藩士がいるのに気づいた。外記を叱ったのもこの男だったにちがいない。御表中之間の、番頭をつとめる加賀谷佐七郎……。
大きく、肩で息しながら、安芸守はしばらく無言で、外記の死体をにらみすえていたが、血刀を加賀谷に渡すと、
「殿ッ、外記儀、なにゆえのご成敗でござりますか。このままでは意を得ませぬ。理由をうけたまわりとうぞんじますッ」
にじり寄って袴の裾をおさえた恭一郎を、
「無礼者ッ」
蹴放すやいなや、
「佐七郎、まいれ」
あとも見ずに、道場から出て行ってしまった。
外記のなきがらを、恭一郎は抱きあげて、眼に、涙をたぎらせた。妹の許婚者である。花の咲くころ

妹の小光は、外記と祝言することになっていたのだ。悲嘆が、思いやられた。
固くなりすぎて、日ごろの生彩をまったく欠いていた安芸守だった。かわそうと思えばかわせた切先だし、どころか逆に相手の身体に、一刀を叩きこむ気ならそれも可能でいながら、主君と思えばこそ外記は斬られた。わけも知らされず、したがって一言の弁明も口にできずに成敗されたのである。
（さむらい勤め……）
その、はかなさ、わりきれなさに、恭一郎の気持は暗く塞がった。
わあとすぐ、うしろで、泣き声が炸けた。茶坊主の宗意だ。
「わたしがいけないんです。こうなったのもわたしのせいです」
「なにを言いたいのだ宗意、お前……」
「昨夜でした」
涙いっぱいな眼を、それでも賢くあたりに配って、少年は小声になった。
「お城下の松野屋から、長崎渡りの蘭の茶が献上になったので、ご老女に言いつけられて殿のお居間までお持ちしました。そのとき、聞いてしまったんです」
ささげ持ってきた天目を、台ごといったん、廊下に置いて、宗意が敷居ぎわにかしこまり、障子に手をかけようとしたとき、座敷の中から洩れたのは、激昂した安芸守の数語だった。
「しかと、さようぬかしおったのか外記めが……。予との立ち合いに、手かげんして勝ちをゆずってお

ると……」
「申しました」
答えたのは、囲碁の相手に伺候していた加賀谷佐七郎の声だ。
「しょせん、実戦の役には立たぬお座敷剣法。同じことなら気持よく、遊ばせてさしあげるのが当世流の忠義と言うものだと、ぬけぬけほざきおりました」
「おのれッ」
宗意は、入るも退るも出来なくなった。
安芸守の憤怒はすさまじい。それを煽った加賀谷の言葉は、少年の理解からしても、
(讒言だ)
不快に耳に突き刺さった。
「だれだ、そこにいるのは……」
その、当の加賀谷の声が、とがめる語気で急に大きくなった。自分に投げつけられたものだと気づいて、宗意は障子をあけ、
「蘭の茶を、お持ちいたしました」
平伏した。
「立ち聞きしていたな坊主」

するどく、加賀谷が言った。
「立ち聞きはしません。でも、しぜん、耳にはいりました」
子供らしい正直な言い方が気に入ったのか、安芸守は、
「その耳、無かったつもりでおれ。他言したらおのれ、素ッ首をねじ切るぞ」
おどかしただけで天目茶碗をつかみ、せっかくの蘭の茶を、風味も香りも意識のほかな表情で、ひと口、がぶりと飲むと、
「もうよい。持ってゆけ」
つき返し、それっきり宗意を追っぱなしてくれたのだという。
「昨夜は城中で宿直しました。二階堂外記どののお身の上が気になっておちおち眠れませんでした。こっそり、お耳に入れて、ご用心をうながそうかと何度も逸ったのですが、他言無用と仰せられた殿のお顔つきを思い出すと、こわくて禁が破れません。それにまさか、昨夜の今日、あのような無体な形で外記どのを斬り殺されるとは、想像もしていなかったものですから……」
お知らせすればよかった、そうすれば外記どのは、事前に領外へ逃れるか、申し開きして冤を解くかしたであろう、口をつぐんでいたために、あたら武士を、讒言の犠牲にしてのけたというのが、少年の悔いであり、痛恨なのであった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c